

第55回中学生作文コンクール

全日本中学校長会賞

生命保険のこと

富山県 氷見市立北部中学校 二年生

網 竜之介

父と母がよく生命保険の話をしてはいたけれど、僕は何のことだかさっぱりわからなかった。毎日、何不自由なく生活できていることが当たり前だと思っていた。保険の営業職員が訪ねてきても、なんとも思わなかった。

この夏、父が病気で他界した。僕が母のお腹にいるときからの病気だったらしいが、そんなに悪くなっていたとは思わなかった。父と母は、僕と姉にそんなことを感じさせないよう気を配りながら、長い間過ごしてきたのだと思う。最後はとにかく悲しくて、くやしくて、『もっと一緒にいればよかった』『もっと話をすればよかった』と後悔した。

葬式が済んでからも母は忙しくしていた。いろんな人が訪ねてきた。たくさん書類を書いていた。

そんなとき、あの保険の営業職員が訪ねてきた。保険は、保険会社に毎月いくら掛け金を払うかわりに、病気になったり死んでしまったりしたときにお金を受け取れるのだということを教えてもらった。世の中に保険というものがあることすらよくわかっていなかった僕は、毎日を安心して過ごしていけるようにと考え出された生命保険という存在にただ驚いていた。話を聞いていく中で、父が保険に入っていたおかげで、父の入院中も生活ができたのだと知った。父は、自分が居なくなっただけから家族が生活できるように、家族のことを思っただけで保険に入っていたのだ。

入退院をたくさんしてきた父に、僕は欲しいものがあるときばかり話しかけていたような気がする。それでも父は、いつもそれに応えてくれていた。そのときの僕はお金のありがたみもわからずにいたのに。

生きていくために大切なのはお金ばかりではないけれど、でもやはり、お金は必要だ。もしかしたら、保険はお金にかたちをかえた「安心」や「はげましいの心」とでも言ったほうがいいのかもわからない。

「僕も大人になったら保険に入ろうかな。」
と、つい口にした僕に、母が、

「今すでに、あなたのために入っている保険があるのよ。」
と教えてくれた。中学校を卒業した後いろいろなとお金がかかるので、貯蓄もできて病気になったときも助かる保険だそう。大人は家族のためにいろいろなことを考えているのだなと思った。

第55回中学生作文コンクール

「保険は、今日も一日無事に過ごせますようにというお守りなのよ。」
と言い足した母の顔が温かく、悲しかった。

父と過ごした十四年間は短かった。短すぎた。入退院を繰り返していたこともあり、思いつきりぶつかっていったことは数えるほどしかなかった。でも僕は、父に大切に育ててもらったことを知っている。思い出も、未来への希望も、父は僕にたくさんのものを残してくれた。だから僕は、僕なりの精一杯で父の思いに応えていきたい。明日はきっとがんばれる。